

知的障害者のデス・エデュケーション構築への試み（2）

- 実践に関する聞き取りを通して -

京都文教短期大学 石野 美也子（会員番号 2485）

京都文教短期大学 張 貞京（会員番号 5512）

キーワード：知的障害者、デス・エデュケーション、実践

1. 研究目的

本研究は、前回に引き続き、知的障害者のデス・エデュケーション構築の試みとして、D県S施設の実践に着目し研究を行ったものである。本研究の大きな目的は「知的障害者にデス・エデュケーションは可能であるか」というところにある。そのことを明確にすることは定義することの難しい知的障害という漠然とした言葉から、働きかけによっては「大きく変化する可能性を持った人」として具体的にとらえ、かつ、何をどのようにサポートすべきか、示すことを可能にする。今回の発表においては、知的障害者が感じる「死」や「老い」を日常生活の中でどのように受け止められ、次のステップにつなげているか、そのためにどのような取り組みの積み重ねがなされたかを知ることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

元施設長2名に対する聞き取りを行い利用者に関わる時に何を大切にし、取り組んできたのかを考察した。聞き取りの日時は以下のとおりである。

I氏への聞き取り 2010年 6月 8日（火曜日） 13:00～16:00

M氏への聞き取り 2010年 10月 15日（金曜日） 17:00～19:00

3. 倫理的配慮

本学会の倫理規定に従って、本人を特定できないように、施設及び氏名に関してはイニシャルを用いた。聞き取りに関しては関係者の承諾を得て行っている。なお、法律用語に従って知的障害者という用語を用いる。

4. 研究結果

元施設長であったI氏とM氏の聞き取りから、「生活に根差した取り組み」と「お経クラブ」に着目した。

(1) 生活に根差した取り組み

この施設では利用者における劇を中心に表現することを続けていくことの大切さと、お茶のお点前やお経クラブという文化的な取り組みと労働（仕事）を通じて集団を作ってきた。そこには生活に根差したグループ作りと個々を大切に作る取り組みがあった。それは、S施設がずっと取り組んできた寮生劇に顕著に表れている。劇は集団のつながりを高めるとともに、個々の発達を促すよう考えられている。

I氏はその中心的な役割を果たしてきた。ライフステージにおける「老い」や「死」は

誰にも訪れるものであり、そこに起こる「不安」や「恐れ」また親しい人との別れには悲しみや痛みを伴うものである。その「不安」や「恐れ」を利用者が訴えた時には、しっかりと向き合い、その気持ちを「誰も同じ」という説得の方法ではなく、一人ひとり個別に関わり、次のステップへ向かう力と「ともに寄り添う」という安心を与えてきた。I氏は生活の中で彼らの不安に向き合い、具体的に伝えてきた。このように、I氏がすぐに不安を解消しようと利用者に向き合う姿勢は職員全体の姿勢へと繋がっていく。

聞き取りにおける具体的な事例として、ある日、自分が「だんだん細くなる」という高齢期に見られる鬱的な不安を抱えた利用者の訴えを聞いたI氏は神社へお参りに行ったり、僧籍を持つM氏にお経を書いてもらったりと、その人が安心できる方法が見つかるまで根気強く取り組んだ。

(2) お経クラブ

M氏は、親や身近な人が亡くなることが続いた時期に、1986年に「お経クラブ」を作り、お経をあげたり、お経を聞き、お経クラブで年に1回お参りに行くという取り組みを大切にしてきた。そこには「ひとりでは不安で乗り越えられないことも、みんなでなら乗り越えられるのではないか」という思いと、この「お経クラブ」の人を中心にクラブに入っていない人も「不安」になったりしたときに、心の支えになるのではないかとということで今も続けている。

(3) 実践の共通点

両氏になぜその取り組みを思いついたのかを尋ねると、どちらも「特別な理由はない」と理由を挙げない。目の前に不安を抱えたり、変化の見受けられる人がいたら、その人に自分が積んできた経験や文化の中から何かできることがないかを探ることがこれらの取り組みにつながったと思われる。その姿勢からは知的障害の有無にかかわらず、支援する、されるという関係のあるべき姿の原型がここにあると感じられた。現在も本施設は、できる限り利用者や家族のお通夜や、お葬式に利用者が出席することを促し、利用者が出席できるよう支援を行っている。それは「別れ」をするとともに「いつも見守ってくれる存在」へと変わり、心の中で生き続けることを確認しあう場でもある。施設内で執り行われた式の弔辞にも、その人への思いと、その人を見送る寮生に対して、さびしくなるけれどみんなを見守ってくれているという思いを託している。

これらは支援するという原則やデス・エデュケーションが前提にあって行われた結果ではない。支援する側として、目の前にいる人の不安や変化に寄り添い、具体的な付き合い方を提案する、それによって彼らが自ら向き合っていけるよう日常の中で支援する。本人の受容や積極的な付き合い方を支援することは、変化する可能性をもった人としての本人への願いが背景にある上記の実践はデス・エデュケーションの基本に通ずる。

(本報告は平成22, 23年度の科学研究費助成金(挑戦的萌芽研究)による『知的障害者のデス・エデュケーションの可能性』(代表者 張 貞京)における構築の試みを述べたものである。)